平和へのおもい

岸本　重子

昭和十九年七月十八日、戦闘の激しい暑い日だった。長男武正は一年たらずして世を去った。

当時、私たちは埼玉県川口市の町はずれの、倉庫の中の一室で生活していた。主人は東京陸軍省勤務だったのである。

毎日、ひっきりなしに、ラジオは「東部軍情報、敵機B二九は房総半島を北上中なり」と報じる。私はその度に、長男を抱いて防空壕に逃げた。防空壕といっても庭に穴を掘って作った粗末なものであった。中にはリンゴ箱を並べ、上に雨戸を載せて、むしろを敷き、家族三人が入るのがやっとである。

雨が降ると水がたまり、箱が浮き、その上を踏むと、ぶくぶくと泥水が吹き上がる。子供を泣かせないように気を配り、うずくまると下半身は水にびっしょり濡れた。寒い、冷

たいといってはいられない。頭上すれすれにB二九が過ぎて行く。

こんな日々にも子供はすくすく成長し、伝い歩きをするようになり、かわいくなって、私たちの生きがいであり、光であった。この子を風邪がもとで死なせてしまったのである。当時、医師は軍医に召集され十分な薬さえなかった。私たちにとっては胸が引き裂ける悲しみであった。このかわいい姿を故郷の両親に見せたかったと泣きながら、夫と二人でだびに付した。子どもを失って、私は敵機を恐れなくなり防空壕に隠れる必要もなくなった。

あの日もよく晴れた青空に、巨大なB二九の銀翼が北上する。何事もなく平和な雄姿に見えた。その時、突然豆粒ほどの一機が弾丸の速度でB二九の翼に体当たりした。

B二九はわずかに揺れたかと見ると小機は火の玉となって頭上に落ちて来る。私は思わず頭を押さえてうずくまった。恐る恐る顔を

あげると、前方の田の中で炎上している。これが肉弾か、さぞかし若い前途ある青年だっただろうに、かわいそうにとしばらく手を合わす。敵機は右翼に煙を引き悠然と飛び去った。それから数日後、東京大空襲があった。東京の夜空が真っ赤に染まり、時々燃え上がる火の粉が黒く見える。主人は今夜も帰って来られないだろうと早い目に戸を閉めた。表に物音がするので出て見ると中年の男が「東京に帰れないので、倉庫の軒にでも泊めていただけませんか」と言うのである。私はためらいもなく「中へ入って休んでください。寒いですから」と招き入れた。朝から何も食べていないとのことで二人は目の映るようなおかゆを分け合ってすすった。

「赤羽周辺は毎夜の空襲で大変です。若い男はいないし、火のなかを逃げまどう女、子供がいてかわいそうです。この間も、赤子を背負い幼子の手を引いて逃げ回る母親を見ると、背中の子供の頭が飛んでないんです。哀

れなものです。戦争とは残酷なものです。」と男はため息をつく。私は声も出なかった。

その夜、二人は枕を並べて横になった。私の心に女としての不安は少しも無かった。

（戦争はいやだが、当時の日本人は自国の人を殺すことはない。食べ物以外を盗む人はいない。信じあい、いたわりあった。さて、このごろの平和な日本に、殺人、強盗、誘拐のニュースが続発する。これでは人が信じられない。なんてかなしいことだろうと思う。）

今も地球の上には、あの忌まわしく、悲惨な戦争が続いている。なぜだろう。

常に犠牲になるのは、弱者、女、子供たちである。

終戦五十年にあたって、当時を顧みて、あらためて心貧しき平和でなきことを、願う一人である。